

## 久野原で発見された

## クモヒトデの化石が新属新種に

北九州市立いのちのたび博物館は、所蔵する有田川町久野原で発見された化石が新属新種のクモヒトデ化石であることが判明したと発表しました。新属のクモヒトデ化石は国内で2例目であり、近畿地方からは初めての新種です。

## ●エナコスファルマ・ナガシマイと命名

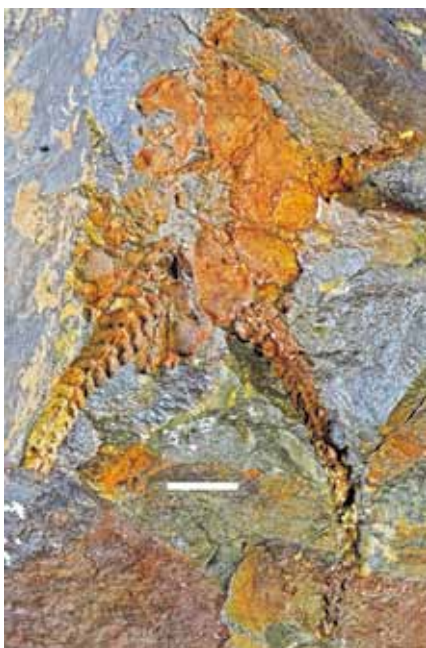
クモヒトデは、先月の広報で紹介したウミユリやウニ、ヒトデなどと同じ棘皮動物きょくひどうぶつです。この化石は1994年に久野原で発見されました。比較的深い海で形成されたと考えられる白亜紀の地層（外和泉層群二川層・約7千万年前）から発見されていますので、ワカヤマソウリュウとも近い時代の化石といえます。その後、化石の寄贈を受けた北九州市立いのちのたび博物館が和歌山県立自然博物館などと共同研究を行い「エナコスファルマ・ナガシマイ」と命名しました。

エナコスファルマという属名は、既に知られているエナコムシウム（中生代ジュラ紀）とオフィオスファルマ（新生代）に似ていることから、それらを組み合わせたものになります。種名のナガシマイは、化石の発見者である故永島ながしまつぎと二氏（福岡市）にちなんで名付けられました。

これまで発見されていた似た特徴を持つクモヒトデ化石は、中生代ジュラ紀（1億6千万年前）と新生代（2千万年前）以降の現生種などが知られていました。今回の発見は、その間の白亜紀ということ、1億年以上空いていた進化の歴史を埋める貴重な発見となりました。

●レプリカ標本を地域交流センター（ALEC）で展示  
実物標本は、北九州市立いのちのたび博物館に収蔵されており、9月23日（水・祝）まで展示公開されています。

地域交流センター（ALEC）では、化石のレプリカを展示しています。このレプリカは、国立科学博物館によって制作され、約3倍に拡大したものです。CTスキャンを用いたデータを基にしていますので、実物標本では見えていない内部を含めた化石全体を見ることが出来ます。（写真出典：Ishida Y. et al., Paleontological Research, 2026 <https://doi.org/10.2517/prpsj.250009>, CC BY 4.0 <https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/> の図を改変）



クモヒトデの化石（スケールバー 5 mm）